

國學院大學學術情報リポジトリ

近代日本の国定修身教科書に作られた国民模範：
二宮金次郎を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-06-19 キーワード (Ja): 修身, 国定教科書, 国民模範, 二宮金次郎 キーワード (En): 作成者: 郭, 偉京, Guo, Weijing メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000496

近代日本の国定修身教科書に作られた国民模範

—二宮金次郎を例として—

Moral Models in Modern Japanese National Self-cultivation Textbooks:

Taking Ninomiya Kinjiro as an Example

郭 偉 京

キーワード：修身 国定教科書 国民模範 二宮金次郎

Key Words: Self-cultivation National textbooks Moral model Ninomiya Kinjiro

要旨

日本では1903年小学校令の改正により、小学校で教科書の国定制度が確立された。小学校令では修身・歴史・地理の教科書および国語読本は必ず国定教科書を使用し、修身教科書を始めとして編集すると規定されている。そのうち、国定修身教科書における二宮金次郎は農民の身分であるが、国民模範として諸徳を一身に集める形象となり、その伝記が学校教育の中に広く浸透した。

『報徳記』の二宮尊徳がいかに教科書の二宮金次郎に転換されたか、二宮金次郎はなぜ修身の道德模範になれたか、近代の国定修身教科書における二宮金次郎の形象がどのように変遷したか、本論文は明治維新から第二次世界大戦終了の1945年までを近代とし、これらの問題を絞って近代日本の国定修身教科書に作られた二宮尊徳の形象について考察を進め、当時の教育政策を検証する。

Abstract

In 1903, Japan established a national system for textbooks in primary schools according to the revision of the Elementary School Order. It stipulates that all textbooks on self-cultivation, history, geography, and Japanese textbooks must use national textbooks, with self-cultivation textbooks as the primary editor. Among them, although the character of Ninomiya Kinjiro was a farmer, he combined various virtues and was portrayed as a moral model, was widely permeated in school education.

How did Ninomiya Sontoku in Hotokuki transform into Ninomiya Kinjiro in textbooks, why did he become a moral model of self-cultivation, and how did the image of Ninomiya Kinjiro in modern national self-cultivation textbooks change. This paper focuses on these issues from 1945, when the Meiji Restoration ended the Second World War, and examines the image of Ninomiya Sontoku in modern Japanese national self-cultivation textbooks, in order to gain a glimpse of the education policy at that time.

はじめに

近代の国定修身教科書に出現された歴史上の人物は二宮尊徳、吉田松陰、楠木正成、松平定信、北畠親房、伊能忠敬、乃木希典、本居宣長などがある。彼らは近代日本における道徳の模範となった。その中に、登場する回数及び課数が最も多いのは二宮尊徳である。「二宮金次郎」は二宮尊徳の幼名であり、門人富田高慶が書き残した『報徳記』に出自されている。富田高慶が村の人々から直接聞いたことや、伝聞として聞いた事柄などによって、二宮尊徳の幼少期や少年期を書き記し、金次郎の生い立ちを描いた。

国定修身教科書における二宮金次郎の形象は、基本的には『報徳記』の記述と同じである。それに、国定修身教科書が四回にわたって改訂される中で、二宮金次郎の形象は変遷し続けている。一般的に、二宮金次郎が学問、勤勉、親孝行を象徴するキャラクターであるが、第五期の教科書では「乃木大将」と並んで登場し、軍人勅諭の解釈に使われる「至誠」な人物として描かれている。故に、本論文は教科書における二宮尊徳の形象変遷を通して当時の教育政策を解明したいと考えられる。

一、二宮尊徳に関する先行研究

(一) 二宮尊徳の生い立ちと報徳思想

二宮尊徳(1787-1856)は、江戸時代後期の経世家、農政家、思想家である。早くから父母に死別し、兄弟は親戚の家に分散し、二宮家伝来の田地はすべて人手に渡った。17歳のとき用水堀の空き地に棄苗を植えて米一俵を収穫したと言われた。26歳のとき借財に苦しむ小田原藩の家老服部家の家政再建を依頼され、厳しい儉約策と藩からの借入金金の運用によって成功した⁽¹⁾。尊徳の指導は600か村に及んでいたと言われた。彼の門人には富田高慶、福住正兄、安居院庄七、岡田良一郎らがいた。

農村復興で活用する二宮尊徳の思想や方法論が「報徳」と呼ばれる。彼の思想「万物にはすべて良い点(徳)があり、それを活用する(報いる)」のに対し、小田

(1) 『朝日日本歴史人物事典』の「二宮尊徳」の解説を参考した。

原藩主から「論語にある以德報徳（徳をもって徳に報いる）である」と評価する。「報徳思想」とは「至誠」を基本とし、「勤労」、「分度」、「推譲」を実行するという考え方で、それを実践するのが「報徳仕法」である。尊徳の門下はその教えを受けて報徳社運動を展開し、明治維新での日本の農業改革で重要な役割を担った。

財政状況を改善するために、二宮尊徳は農作物の効率的な収穫量拡大に努力したのである。そこで、彼は作物の栽培方法の効率化だけではなく、農業の効率を上げ、そして田畑と灌漑施設の整備、農作業や日常生活を快適にするために必要な社会資本と個人の住環境の整備、農業に従事する人々の意識改革などを行った。このように、二宮尊徳は、建設土木技術者、営農指導者、哲学者、人々の考え方を正そうとする教師、そして商売のやり方を教える経営コンサルタントとして描かれている。

（二）『報徳記』における二宮尊徳の形象

『報徳記』は尊徳の門人富田高慶の著作であり、1856年11月2日に成稿、のち八巻に編成された。『報徳記』の序に、「抑尊徳事業。尤見効於墾闢。世或視爲農學者流。不知其報天地功德者。祭義所謂報本反始」⁽²⁾と書かれた。そのほか、1880年10月、富田高慶の旧主である旧相馬藩主相馬充胤が明治天皇に『報徳記』を献上した時に、『進報徳記表』を記した。『進報徳記表』に「行信義。勤節儉。尺土拓至丈畝。鎔銖積致鉅萬。庶乎報徳之道。是則尊徳之平素持論」と記され、尊徳の「信義」、「節儉」の形象を立てることであった。

『報徳記』の「卷一 二宮先生幼時艱難事跡ノ大略」において、「茲ニ二宮金次郎尊徳先生ノ實跡ヲ尋ルニ歳月久シクシテ其詳細ヲ知ルコトアタハズ且先生謙遜ニシテ自己ノ功績ヲ説カズ聊カ邑人ノ口碑ニ殘レリトイヘドモ萬ガ一ニ及バズ（中略）邑人ノ口碑ニ基キ斯ニ筆ヲ操テ其概略ヲ記セリ」⁽³⁾という記述があった。それで、『報徳記』の巻一に村の人々から直接に聞きしたことや、伝聞として聞いた事柄などによって、二宮尊徳の幼少期や少年期を書き記し、金次郎の成長経歴を描

(2) 富田高慶述。『報徳記』。宮内省、1885年。

(3) 富田高慶述。『報徳記』。宮内省、1885年、p1。現代語訳：ここに二宮金次郎尊徳先生の実跡を尋ねるに、歳月が久しくたつてその詳細を知ることができない。かつ先生は謙遜であつて自己の功績を説かれることがなかった。いささか村人の口伝に残っていても、万が一にも及ばない。（中略）村人の口伝に基づいて、ここに筆をとつてその概略を記してみる。

いていたことを示している。

『報徳記』の巻一に「先生姓ハ平名ハ尊徳通稱金次郎父ハ二宮利右衛門母ハ曾我別所村川窪某ノ女ナリ祖父銀右衛門常ニ節儉ヲ守リ家業ニ力ヲ盡シ(中略)先生終身言此事ニ及ベバ必ず涕泣シテ父母ノ大恩無量ナルコトヲ云フ」⁽⁴⁾と書かれた。そのうちに、二宮尊徳の家族と生い立ちを紹介した上で、幼年期と少年期での「親孝行」、「勤勉」の形象を描き出している。それに、二宮尊徳が伯父の家に預けられたが、逆境に卓越した才能を発揮し、家の再興となって思想と事業の基礎を造り上げることを述べている。以下は表によって示している。

表1 二宮尊徳の幼少期や少年期の略年表(『報徳記』の巻一により)

	年齢	年号	西暦	出来事
幼年貧乏	1才	天明7	1787	両親が貧困の中に3人の子供を養育する。
一家苦難	5	寛政3	1791	酒匂川洪水で田が大幅に流失し、元より赤貧。
		某年		父利右衛門病にかかり、医師某の好意をえる。父親は酒を好むため、先生の若年時に毎晩に草鞋を作って酒を交換する。
	14	寛政12	1800	父大病に衰弱し、遂に同年死亡。先生が母の慈愛を察し、山に薪を伐った。途中で「大学」の本を持ち、歩くながら読み取る。
寄食時代	16	享和2	1802	母死亡。伯父万兵衛の家に寄食する。終日家業を勤め、夜遅くまで勉強していると叱られた。
	17	享和3	1803	捨苗を植えて耨一俵を収穫、「積小為大」の理を発見。困窮の中で人を救う心がある。
	18	文化元	1804	万兵衛方を辞し、岡部伊助方に入出する。観音経によって思想の悟りを得る。
	19	文化2	1805	岡部方を辞し、二宮七左衛門方に寄食。余暇に廢田復旧・耕作を進める

『報徳記』は主に二宮尊徳の事跡を内容とする伝記として、尊徳の思想と業績を詳述し、最も古い資料であり、最も信頼できる二宮尊徳の伝記と認められている。1883年、明治天皇の命で『報徳記』が宮内省によって出版され、その後、国

(4) 富田高慶述。『報徳記』。宮内省、1885年、p2。現代語訳:先生の姓は平、名は尊徳、通称金次郎。父は二宮利右衛門、母は曾我別所村の川窪某の娘である。祖父の銀右衛門は常に節儉を守って家業に力を尽くし(中略)先生は終身にこのことを言うと、必ず涕泣して父母の大恩が無量なることをいう。

民に広く読まれている。その後、二宮尊徳の報徳思想をさらに広めるため、明治維新の頃、二宮尊徳を模範として貧しい農民を救済し、道徳と経済を調和させて様々な生き方を国民の生活に定着させる報徳運動が展開された。

二、修身における理想的な人間像—二宮金次郎—

(一) 修身教育の移り変わり

修身科の前身は、「学制」(明治五年八月三日文部省布達第十三号別冊)第二十七章で定められた「下等小学教科 六修身解意」である。「小学教則」(明治五年九月八日文部省布達番外)の第二章に「修身口授(ギョウギノサトシ) 一週二字即二日置キニ一字 民家童蒙教草等ヲ以テ教師ロツカラ縷々之ヲ説諭ス」、「単語誦誦(コトバノソラヨミ) 一週四字 一人ツ、直立シ前日ヨリ学フ処ヲ誦セシメ或ハ之ヲ盤上ニ記サシム」⁽⁵⁾という内容があり、修身科の授業が『民家童蒙解』などの教科書を口授することで行われた。

修身科が1879年に学科の最後に置かれ、1880年に筆頭の学科を位置つけられてきた。それと同時に、「教学聖旨大旨」が公布され、「故ニ自今以往祖宗ノ訓典ニ基ヅキ専ラ仁義忠孝ヲ明カニシ道徳ノ学ハ孔子ヲ主トシテ人々誠實品行ヲ尚トヒ然ル上各科ノ学ハ其才器ニ随テ益々畏長シ道徳才藝本末全備シテ大中至正ノ敎学天下ニ布満セシメ」⁽⁶⁾ということを定めた。教育の要旨は仁義忠孝の明確化、知識と才能の追求であるため、東洋道徳、特に儒教道徳を中心とした修身教育方針も生まれている。

1891年、「小学校教則大綱」(明治二十四年十一月十七日文部省令第十一号)の第二条に、「尋常小学校ニ於テハ孝悌、友愛、仁慈、信実、礼敬、義勇、恭儉等実践ノ方法ヲ授ケ殊ニ尊王愛国ノ志氣ヲ養ハシムコトヲ努メ又国家ニ対スル責務ノ大要ヲ指示シ……」⁽⁷⁾と定められている。修身科目が孝悌、友愛、仁慈、信実、礼敬、義勇、恭儉等の徳目を教え、「尊王愛国ノ志氣」を養うことを指している。それから、修身科目の内容が儒教道徳の中心である「孝」を基本原理とするものから、「忠君」や「愛国」という国家倫理を中心とするものへと転換していったと

(5) 教育史編纂会編、『明治以降教育制度発達史 第1巻』。竜吟社、1938年、p399。

(6) 文部省編、『学制七十年史』。帝国地方行政学会、1942年、p33-p34。

(7) 宮原誠一・丸木政臣・伊崎暁生・藤岡貞彦、『資料日本現代教育史4』。三省堂、1974年、p134。

考えられる。

(二) 二宮金次郎を人物教材として

1890年に、教育方針を明らかにするため、明治天皇の命で「教育ニ関スル勅語」が発表され、道徳教育の方向を再び明確に示し、修身教科書に決定的な影響を与えた。その後、ヘルバルト派の教育思想の影響を受け、「教育勅語」に示された徳目を毎学年(毎巻)で繰り返すという編集形式をとっている「徳目主義」教科書から、模範的な人物を中心として編集する「人物主義」教科書に変わった。「人物主義」教科書は、人物に関する伝記を基として、生活で定着して優れている徳行を物語で教えている。その後、国定修身教科書は徳目をテーマとして人物伝記を内容とする形式になり、改訂を経たものの、基本的にはこの二つの編集方法を踏襲している。

二宮尊徳が明治中期以降に教科書の登場人物の主流となったのは、二宮尊徳の門人らが報徳社運動を展開するからである。当時あって、農村の労働意欲の低下を防止するため、明治政府が社会教化において「勤儉力行」を鼓吹した。その上、勤勉と儉約を強調して農民の生き方を教える尊徳の態度は、いずれの時代の施政者にとってもまことに都合のよい人物であった⁽⁸⁾。そのため、『報徳記』における「勤儉力行」の象徴である二宮尊徳が明治政府により模範として推賞され、人物教材として修身教育に採用されるようになった。

一方で、井上哲次郎が「国定教科書に二宮翁を加えたるは、最も選の宜しきを得たるものと謂ふ可し。鷹山、義公、烈公の如きは大名なるが故に、一般平民にその縁すこぶる遠く、感化また及び難しきものあり。独り二宮翁は平民にして、而も農夫の子として成長せり。故に、農家の子女には境遇近く、境涯相似たり」⁽⁹⁾と指摘した。それから、二宮尊徳が国定教科書に導入されたもう一つの理由は、固有な身分や困難な生涯が初等教育における大部分の学生に親近感があったことである。

その結果、国定修身教科書の二宮尊徳は政治的な指導者より営農の実務家として現れている。歴史人物としての「二宮尊徳」が報徳仕法を創始した篤農家と認

(8) 中村紀久二、『教科書の社会史』。岩波書店、1992年、p198-p199。

(9) 留岡幸助編、『二宮翁と諸家』。人道社、1906年。p99-p100。

めされ、学校教育の中で「二宮金次郎」が勤勉好学の少年として描かれている。そして、困難な状況に直面する時に、よく学び、働き、親を大事にする金次郎は、子供が規範とされるべき人物だとイメージされていた⁽¹⁰⁾。国定修身教科書における「二宮金次郎」の形象は『報徳記』から引用され、二宮尊徳の子供時代が同じ教育段階の子供と近いので、勤勉することの意味をよく理解させることができると考えられた。

三、国定修身教科書に作られた国民模範

(一) 教科書における二宮金次郎

1904年発行された第一期国定修身教科書「尋常小学修身書」では、二宮金次郎が「孝行」、「勤勉」、「学問」、「自営」という四つの徳目で結ばれていた。第二期国定修身教科書には、尋常小学修身書における「親の恩」、「孝行」、「兄弟仲良くせよ」、「仕事に励め」、「親類」、「学問」、「勤儉」という七つの徳目がすべて二宮金次郎の形象を採用しており、高等小学修身書には「至誠」、「正直」の徳目で金次郎の経歴が述べられている。第三期の尋常小学修身教科書が「孝行」、「仕事に励め」、「学問」という三つの徳目に金次郎を取り上げた上に、高等小学修身教科書において「至誠」、「正直」を引き続き採用した。それに、内容が第一期、第二期より詳しく書かれた。第四期の尋常小学修身教科書が第三期とほぼ同じだったが、高等小学修身教科書の「至誠」、「正直」を削除した。

その内容から見ると、第一期から第四期までの国定修身教科書では二宮金次郎が勉学、勤労、孝行の徳目で代表的な人物として採用された。「孝行」、「仕事に励め」、「学問」という三つの徳目に二宮金次郎を繰り返して取り上げた上で、書かれた言葉は『報徳記』の原典的な内容と比較してほぼ同じである。しかし、第五期の修身教科書において、「一つぶの米」のみならず、二宮金次郎が「乃木大将」と共に「至誠」の代表人物として取り上げられたことである。総じて国定修身教科書で「二宮金次郎」は合計二十三回登場している。

(10) セップ・リンハルト、井上章一編、『日本人の労働と遊び・歴史と現状』、国際日本文化研究センター、1998年、p136。

(二) 二宮金次郎の形象変遷から見る教育政策

1. 第一期の国定修身教科書

二宮金次郎の基本的な形象は、第一期の国定修身教科書の徳目である「孝行」、「勤勉」、「学問」、「自営」に沿って設定された。「孝行」は親に家事を手伝うことに体现される。さらに、「コーハ、トクノモト」(孝は、徳の本)という結びの言葉には、「孝がすべての徳の根本」という思いが込められている。その言葉は『孝経』から引用され、儒家思想を体现していると同時に後期の「忠孝一本」という考え方の基本となっている。教育勅語の冒頭には「父母ニ孝ニ」という言葉があり、この時代の親孝行教育の重要性を反映している。

そのほか、二宮金次郎の「勤勉」は普請工事をする時に休まず働いたによって現れている。「学問」は二宮金次郎が叔父の家に行った時、仕事を終えて初めて本を読むことを許されるという物語であり、最後に「カンナン、人ヲタマニス」という言葉が付いている。その言葉は、「艱難、汝を玉にす」という諺を引用し、人間は多くの艱難を経て始めて人格を向上させることができるという意味を伝えている。そして、人は困難に直面した時に、勉強を忘れずに進めていくというような



図1 1903年10月文部省著『尋常小學校修身書 第3學年兒童用』に所載。

理念を強調している。

「自営」の課において、二宮金次郎が精出して働き、荒れ果てた家を直し、しまいには偉い人になるという記述もあった。その中に、「自分の家」に対する「自分の力」を起こして家を復興することが強調された。それと同時に、「自営」が個人の家業に重きを置いていたにもかかわらず、その中で仕事に精を出すべきだという内容は「勤勉」と密接な関係があった。「自営」が近代市民社会の道徳として、当時の日本教育者が西洋思想に対して日本的な解釈を行い、日本人の独特な生き方をまとめていることがわかる。

明治30年代のヘルバルト学派の影響で、人物主義の教材が童話や模範的な人物の伝記のモデルを扱い、児童の興味を喚起しつつ品性の陶冶を目指している。しかし、人物の例話が徳目によってその伝記が切断されている⁽¹¹⁾という批判も現れる。そして、内容も簡単すぎて整体性を軽視する傾向も存在している。例話として採用される人物はほとんど日本人であるが、九人の西洋人も存在している。それで、第一期国定教科書は国体観念の教育を目的としたが、近代市民の倫理思想に対して包容性を持っていると考えられる。

2. 第二期の国定修身教科書

第二期国定修身教科書では、二宮金次郎に関する徳目が五期の中で最も多いので、形象の拡大期と見ることができる。「親の恩」、「孝行」、「兄弟仲良くせよ」、「親類」、「勤儉」が家族に関する徳目として、内容的にも大きな割合を占めており、第二期国定修身教科書が家族観念の教育を重視していることがわかる。それらの課によって、両親、兄弟ないし親戚との良い関係を闡明し、孝行と勤儉が家業の復興に対する重要性を指摘し、当時の社会における家族観念の薄さという現象を側面的に批判している。

「親の恩」において、貧乏な家に父母が子供を育てるために色々苦勞をしたことが書かれている。「孝行」では、家事の手伝いより父母の心を察して家族で集まって一緒に過ごすということを描いている。「兄弟を仲良くせよ」では、二宮金次郎は朝早くから夜遅くまで休まずに働いて、二人の弟を養ったことを記述し、さらに家族の団結を描写している。「親類」の中で、二宮金次郎と二人の弟を分け

(11) 海後宗臣, 仲新, 寺崎昌男, 『教科書でみる近現代日本の教育』, 東京書籍, 1999年, p117.

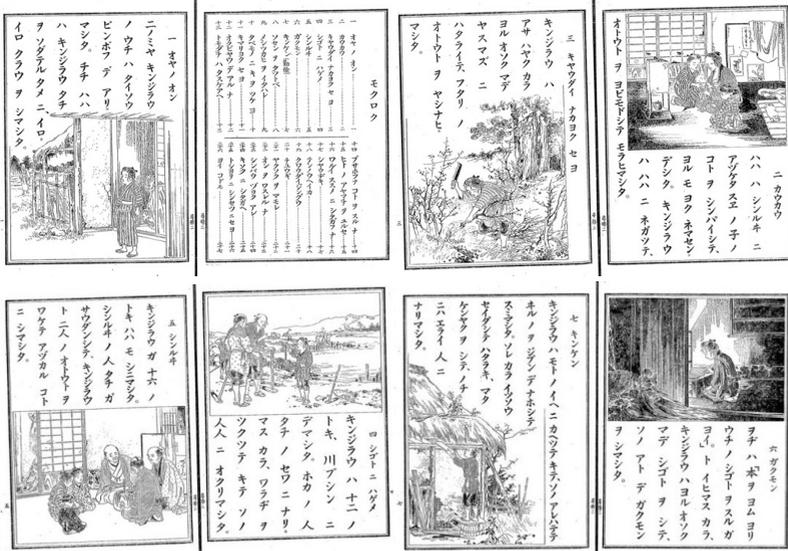


図2 1910年3月文部省著『尋常小学修身書 卷二児童用』に所載。

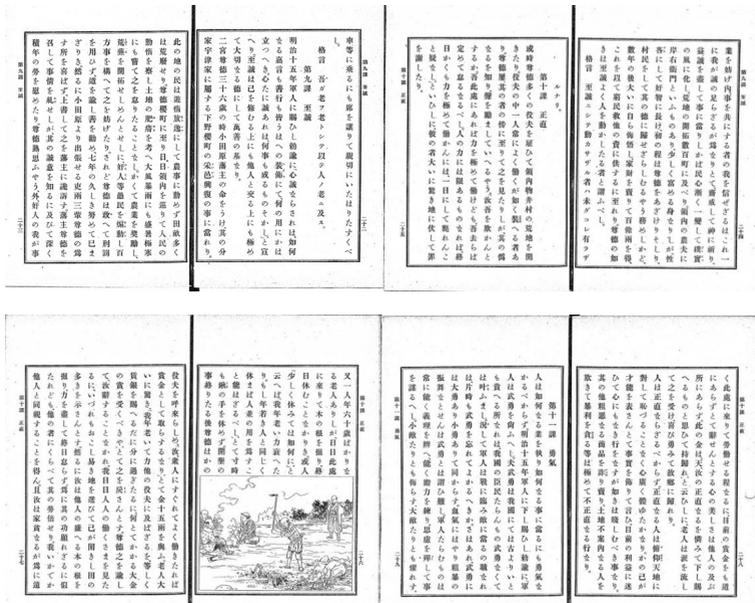


図3 1913年1月文部省著『高等小学修身書 卷一児童用』に所載。

て親類を預かることにした。最後に、金次郎は元の家に帰って自分で家業を立て直すことで「勤儉」の重要性を強調している。

高等小学修身教科書で報徳思想を中心とした「至誠」という課では、二宮尊徳が農業を奨励し、荒地を開拓し、数年後には吝嗇な人も至誠の影響を受け、悪を改めて善に向かい、貧民を救済し始めたことを述べている。「至誠」は報徳訓の一つで、物事への取り組みに真心を持って誠実に行くことを意味する。教科書には「至誠」が全ての善の基本と位置付けた。これは「心誠ならされは、如何なる嘉言も善行も皆うはへの装飾にて、何の用にかは立つへき。心たに誠あれは何事も成るものそかし」という軍人勅諭の解釈から来ている。

「正直」という課において、二宮尊徳と老人の話が持ち上がっている。老人は率先して全体のために良いと思うことをたゆまず続けているので、尊徳が老人の正直なところを見てお金を贈っている。最後に、「正直なる人は俯仰天地に対して恥づることなく心廣く體ゆたかなり」と言われ、商品を偽って販売し、事情に通じていない人を騙し、巨額の利益を得るなど、極めて不正直な行為であると指明している。このことから、個人の正直な倫理観の教育には、個人の生活だけでなく、経済的・社会的な側面も含んでいることがわかる。

第一期国定修身教科書とは対照的に、第二期の尋常小学修身教科書は家族国家倫理を重視している。高等小学修身教科書の「至誠」と「正直」が、表向きには近代市民倫理の影響を受けた当時の社会における誠実の欠如を反映して勤勉と誠実の重要性を強調しているが、実際には国家主義思想の台頭を反映して第三期の教科書で忠孝を統合するための土台を築いている。それに、「至誠」において、伝統的な徳目と「軍人勅諭」を繋がって相互に解釈し、儒教主義的な倫理をより強く示したと同時に、軍国主義的な内容が教科書に登場した。

3. 第三期の国定修身教科書

国定尋常小学修身教科書の第二期と第三期を比較すると、小学校修身教科書はカタカナ表記からひらがな表記に変わっていることがわかる。第三期で「孝行」、「仕事に励め」、「学問」という三つの課があるが、第二期より内容が豊富である。また、各課の文字数が大幅に増え、構成がより充実になり、人物の特徴を描写する内容が加えられ、形象がより鮮明になり、生き生きとした物語に変えていった。しかし、全体的に見れば、第二期で追加された国家主義、家族主義、儒教主

義的な内容の一部が削除された。

「孝行」には、これまで分散していた家族に関する道徳を結びつけている。二宮金次郎は幼い頃から両親を助けるのが親孝行であった。末子のことを心配して毎晩よく眠れない母に、金次郎は「私が一生懸命に働きますから、弟を連れ戻して下さい」と頼んでいる。それから、親が子を愛し、家族の団欒も親孝行の一つの表現となった。それらの内容は、『報徳記』における父が病気になった時に家事の手助け、母が末っ子を引き取った後の一家団欒と一致している。本文の最後に「孝は徳のはじめ」ということわざが増えたことから、第三期の教科書では「孝行」に関する教育が依然として重視されていることがわかる。

「仕事に励め」では、二宮金次郎は父に代わって川普請に出た。それに、仕事をすまして家へ帰ると、夜遅くまで起きていて草鞋を作って仕事場での人々に贈るというもので、ある程度、団結互助の精神が表れている。また、二宮金次郎は朝から晩まで休まずに仕事をすることを強調し、彼は薪を割ったり、縄を編んだり、わらじを作ったりすることによって、当時社会での動きもすれば労働を厭しむという国民の通弊を戒め、深く労働の大切さを実感させた目的を持っていると



図4 1918年2月文部省著『尋常小学修身書 卷三兒童用』に所載。

考えられていた。

「学問」では、二宮金次郎が読書、習字、算術を学び、しかも勉強のために油
菜を栽培して播種後に収穫した種子を油に取り替えた。このように仕事をしてい
る間でも学習を忘れないという骨身を惜しまない精神を引き出した。そして、叔



図5 1933年3月文部省著『高等小学修身書 巻一 児童用』に所載。

父に対する言語描写を通じて、二宮金次郎の学習環境の難しさを体現し、二宮金次郎の勤勉な行為への同情心をさらに深めている。同時に、二宮金次郎が勉強中も儉約の習慣を持ち、叔父の要求に従っていたことをより深く体現している。

国定尋常小学修身教科書の第三期と第二期を比較すると、君国一体という思想が浮き彫っている。「至誠」では、「我等が父母に事へるにも君國のために盡くすにも、他人から強ひられてするのでなく、又私慾からするのでなく、たゞ自分の良心の命ずるまゝにさうせずには居られないのが至誠である」と書いている。その言葉が、自発的に君主へ奉仕することを強調している。「正直」において、一つ老人が骨身を惜しまずに働き、金銭的な報酬を受け取らないという物語を述べ、言行の公明正大と商工業の信用を強調している。

第三期国定修身教科書の内容から見ると、大正デモクラシーの時期にさまざまな思想が流入していたため、人間関係と外国貿易の内容が出現するようになった。多様な社会思潮に対して、近代の日本政府が尋常小学と高等小学修身教科書における二宮金次郎の「孝行」、「仕事に励め」、「学問」、「正直」、「至誠」という人物像を利用して国家への奉仕を強調している。また、二宮金次郎の銅像の設立は1920年代後半から1940年代にかけて日本の小学校で大きなブームとなったから、二宮金次郎の勤勉という人物像が全面的に明確化されている。

4. 第四期の国定修身教科書

第四期国定修身教科書における金次郎に関する文章は第三期尋常小学修身教科書の「孝行」、「仕事に励め」、「学問」を維持したが、第三期高等小学修身教科書の「至誠」と「正直」を削除した。総じて言えば、修身教科書の内容には国家の道徳に関する内容が増えたが、人間関係や個人道徳についての内容が減らされ、国家主義と軍国主義の傾向が一層強まったと言われている。すなわち、第四期国定教科書が「忠良ナル臣民」の育成に向けて編成し、忠君愛国の精神と天皇および国家に対する従順さ、更に国家主義的な内容を強調している。

5. 第五期の国定修身教科書

第五期国定修身教科書において、『初等科修身一』の「一つぶの米」と『高等科修身一 男子用』の「至誠」だけが二宮金次郎に関する課であり、従来の教科書の内容より大幅に減るようになった。具体的に言うと、「一つぶの米」の本文におい

て、二宮金次郎の「親孝行」、「兄弟仲良く」、「学問」の実践が包含されている。しかし、叔父の家に寄食する時に苦しくてやむ得ない仕事を提起しなくなり、「悲しいことがあっても、つらいことがあっても、二宮金次郎はよくしんぼうしました」という記述が残っている。

「一つぶの米」の題目は、「一万石の米は一粒ずつ積んだもの。1万町歩の田は一畝ずつの積んだもの。万里の道は一步ずつ積み重ねたもの。高い築山も、もっこ一杯ずつの土を積んだものなのだから小事を努めて怠らなければ、大事は必ず成就する」⁽¹²⁾ということわざから生まれ、「積小為大」の道理を含んでいる。前の「しんぼう」ということを結んで考えると、仕事は何ごとでも仕遂げるまで続けるという趣旨を伝えている。

その上、もう一つの重要性を持っている点は実践の目的である。「一つぶの米」が勤労の精神に関する一つの課であり、日本政府の食糧増産と学徒動員の要請と結ばれている。「一つぶの米」の「家をおこし、国をさかんにするには、心をゆるめないではたらかなければならない」、「君国のため盡くすのも、父母につかへるのも、決して他から強要されてするのではなく、又、私利私欲のために行なふものでもない」という言葉から見ると、戦時下の修身教育が国家への義務を非常に重視することがわかる。

中国の研究者である歩平が「戦時期における国定教科書は、日本の若い世代を侵略戦争に参加させるための重要な宣伝ツールであった」⁽¹³⁾と指摘した。日本の研究者である唐沢富太郎は第五期修身教科書で「あげられた人々は、いずれも文字通り『滅私奉公』、君国の為に尽くした『忠良な臣民』であって、ここにこそ、国家が児童達に意図した具体的目標があったのである」⁽¹⁴⁾と述べている。第五期高等小学校修身教科書の冒頭に詔書という部分があり、天壤無窮の神勅、軍人勅諭、教育勅語などが順に述べられ、それも以上の観点を踏まえている。

そして、第十課「至誠」には「二宮尊徳先生」と「乃木大将」が共に「至誠」の代表人物として取り上げ、軍人勅諭と日本の伝統的な「明き清き直き誠の心」を同一視している。以上から、教育と戦争の結びつきは、教科書に浸透している軍国

(12) 福住正兄原著 佐々井典比古訳注。『現代版報徳全書 第6』。一円融合会、1955年、p25。

(13) 歩平、「日本教科書問題の歴史考察と思考」、『課程・教材・教法』。2016年第11期、p112-122。

原文：戦争时期的“国定教科書”是鼓动日本年轻一代参加侵略战争的重要的宣传工具。

(14) 唐沢富太郎、『教科書の歴史:教科書と日本人の形成 [本編]』。創文社、1956年、p498。

主義的な教育内容にも表れている。言い換えれば、戦争の激化と拡大に従って「皇国ノ道義的使命」という国民道徳を促したために、思想統制の強化が極点に達した。それに、軍国主義の実行に効果がある教材を編成することを留意し、国家戦時体制を維持するように強化した。

おわりに

「国民模範」という概念は、近代日本において国民性の構築に重要な役割を果たしている。日本政府はある人物をロールモデルとして宣伝することで、日本人の国家的な誇りを醸成することを目指している。「国民模範」の形象は過去に生きた時代と空間の産物であると言えるが、今でも日本の価値観や志向を象徴する人物として伝えられている。国定修身教科書に作られた「国民模範」の形象の歴史的な由来を分析し、それに込められた教育目標を探ることで、本研究は近代の異なる時期における日本の教科書の特徴をより直感的に理解できるだけでなく、複雑な教育政策の背後にある実際の目的を明らかにする。

最も広範な国民の代表としての二宮尊徳は、思想に強い民衆意識があったため、民衆、特に農民にとって特別な親和性を持つ人物であった。勤儉力行の精神によってみずからの運命を切り開いた二宮尊徳は、修身教育による国民教化の重要な模範とされている。二宮尊徳の幼少期の苦難を通して、「至誠」の心、働くことと勉強することの大切さを知ることができる。二宮尊徳の思想と働きは、「孝行」、「積小為大」、「勤勉」、「仕事に励む」、「兄弟仲良く」、「親類」などの国民道徳と密接に繋がり、国民の心に浸透していったのである。

しかし、ナショナリズムの発展に従い、二宮尊徳は家族の孝子、勤勉力行の士から「天皇への忠」という形象へ強行に押し曲げていった。こうして、二宮尊徳は道徳の模範だけでなく、自主的に国家に献身・奉公する国民の象徴として描かれるようになった。それによって、二宮尊徳の形象変遷から異なる時代での修身教育の特徴と教育政策を垣間見ることができる。今後は、多くの人物教材を分析することを通じて近代日本の教育目的と政策変遷をさらに深めていこうと考えている。

参考文献

- 富田高慶述. 『報徳記』. 宮内省, 1885年. 教育史編纂会編. 『明治以降教育制度発達史 第1巻』. 竜吟社, 1938年。
- 文部省編. 『学制七十年史』. 帝国地方行政学会, 1942年。
- 宮原誠一・丸木政臣・伊崎暁生・藤岡貞彦. 『資料日本現代教育史4』. 三省堂, 1974年。
- 中村紀久二. 『教科書の社会史』. 岩波書店, 1992年。
- 留岡幸助編. 『二宮翁と諸家』. 人道社, 1906年。
- セップ・リンハルト, 井上章一編, 『日本人の労働と遊び・歴史と現状』, 国際日本文化研究センター, 1998年。
- 海後宗臣, 仲新, 寺崎昌男. 『教科書でみる近現代日本の教育』. 東京書籍, 1999年。
- 福住正兄原著 佐々井典比古訳注. 『現代版報徳全書 第6』. 一円融合会, 1955年。
- 歩平. 「日本教科書问题的歴史考察と思考」. 『課程・教材・教法』. 2016年第11期。
- 唐沢富太郎. 『教科書の歴史：教科書と日本人の形成〔本編〕』. 創文社, 1956年。